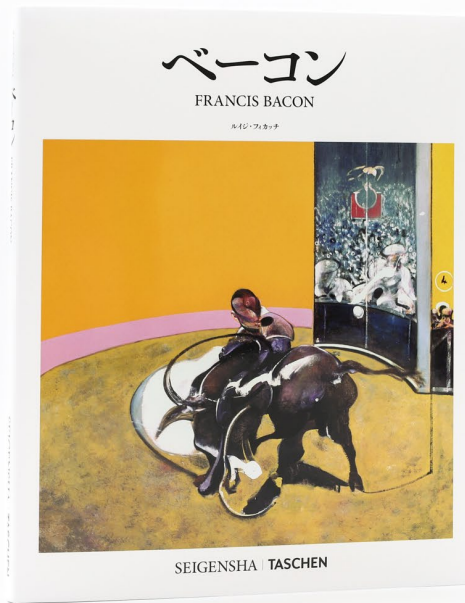
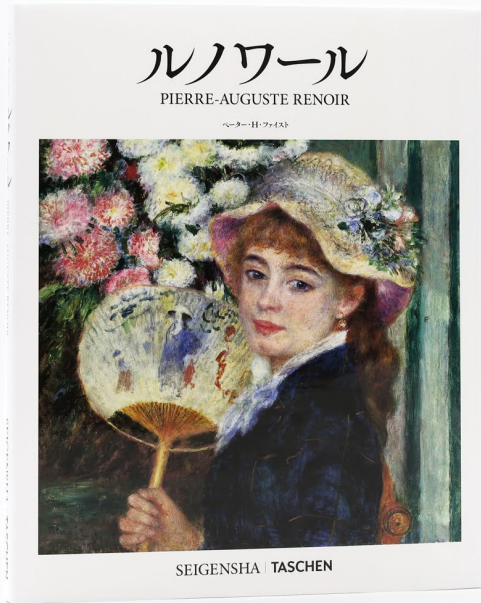


平素より大変お世話になっております。  
このたび小社では、標記の書籍を刊行する運びとなりましたのでご案内申し上げます。

ヨーロッパを代表する  
アートブックの出版社・TASCHEN(タッシェン)と  
青幻舎のコラボレーション、待望の第二弾！

「ベーシックアートシリーズ」日本語版、  
『ルノワール』『ベーコン』2タイトル同時刊行！



株式会社青幻舎は4月中旬に、ドイツの美術出版社・TASCHEN(タッシェン)の大人気アート入門書シリーズ「ベーシックアートシリーズ」の日本語版を2冊同時刊行いたします。2025年10月に刊行した第一弾『モネ』『ゴッホ』に続く第二弾は『ルノワール』『ベーコン』です。

本書への取材などご要望がございましたら、下記担当までご一報下さい。何卒よろしくごお願い申し上げます。

## ■ 書籍概要

1980年、ドイツ・ケルンの小さなコミックショップから始まったTASCHEN(タッシェン)。昨年、創業45周年を迎え、現在パリ、ロンドン、ベルリン、ビバリーヒルズ、香港など世界主要都市に11の直営店を構え、アートブック界を牽引する存在となりました。同社は「多様性と革新」という使命のもと、10ドルの普及版から数万ドルの超大型本まで幅広いラインナップを取り揃え、既存の出版社が敬遠してきたLGBTやエロティカといったテーマも一般のアート書と同等に扱い、常にデザイン性の高いアートブックを世に送り出してきました。ジャンルや価格を問わず、あらゆるテーマに敬意を払い、文化として広く人々に触れる機会を創出する姿勢は、出版界の常識を塗り替え続けています。

「ベーシックアートシリーズ」は、TASCHENが1985年に刊行をスタートして以来、世界80カ国で販売され、20カ国以上で翻訳されてきた、大人気のアート入門書シリーズです。一冊で一作家を取り上げるスタイルを基本とし、初期作から代表作までを網羅した豊富な作品図版と、当時の社会情勢や生活環境にも触れた詳しい解説で、その生涯を紐解きます。写真付きの略年譜も備えた充実の構成は、コンパクトながら“美術の必携書”として世界中で高く評価されてきました。

2025年10月に創刊した待望の日本語版シリーズの第一弾『モネ』『ゴッホ』に続き、第二弾として『ルノワール』『ベーコン』の2タイトルを同時刊行いたします。

日本で絶大な人気を誇る「印象派」を牽引する存在の一人で、光あふれる色彩で「幸福の画家」と称えられる巨匠ピエール＝オーギュスト・ルノワール。2013年に東京国立近代美術館で開催された回顧展は当時大きな反響を呼び、日本のアートシーンにおいてその地位を不動のものとしたフランシス・ベーコン。対照的な作風でありながら、どちらも日本のアートファンにとって非常に関心の高い、目が離せない存在です。

ネットを通じて誰もが気軽にアートに触れることができる、今の時代ならではの楽しみ方。そこから一步踏み込んで、美術史の流れや作家の人生をより詳しく学ぶことができれば、作品の理解が深まり、日々の鑑賞をより豊かなものへと変えられます。本書は、そんな読者のアート体験を、より濃密で価値あるものへと高める一助となるはずで

そしてシリーズ第三弾の刊行も決定。イギリスを代表する風景画家「ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー」と、20世紀美術に最も影響を与えた芸術家「マルセル・デュシャン」を取り上げ、2026年秋頃に2冊同時刊行いたします。

### TASCHEN(タッシェン)とは…

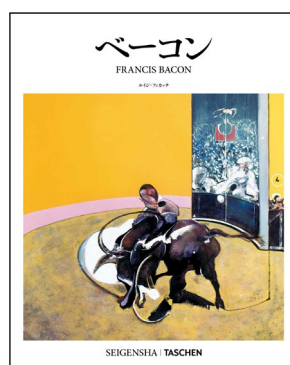
1980年にドイツのケルンで創業したアート、デザイン、建築など多彩な分野の書籍を手がけている出版社。

「革新的で美しい美術書を大衆的な価格で提供する」という理念のもと、世界中の名作や貴重なコレクションを収めた作品集のほか、アート関連書籍を20以上の言語で刊行している。



### ■ 書誌情報

発売: 2026年4月中旬  
 書名: SEIGENSHA|TASCHEN  
 Basic Art Series  
 ルノワール  
 PIERRE-AUGUSTE RENOIR  
 著者: ペーター・H・ファイスト  
 判型: 266×216×12mm  
 総頁: 96頁  
 製本: 上製  
 定価: 2,750円(本体2,500円)  
 ISBN: 978-4-86831-027-3 C0071



### ■ 書誌情報

発売: 2025年4月中旬  
 書名: SEIGENSHA|TASCHEN  
 Basic Art Series  
 ベーコン  
 FRANCIS BACON  
 著者: ルイジ・フィカッチ  
 判型: 266×216×12mm  
 総頁: 96頁  
 製本: 上製  
 定価: 2,750円(本体2,500円)  
 ISBN: 978-4-86831-028-0 C0071

## ■ 内容紹介

### ルノワール PIERRE-AUGUSTE RENOIR

ピエール＝オーギュスト・ルノワール(1841-1919)は、陽光あふれる官能的な作品で時代を超えて人々を魅了してきました。モネなど同時代の画家仲間と共に色彩の改革に挑む一方、親密感と優しさをたたえた恋人や母親、数多くの裸体に魅せられ、その姿を瑞々しく描きました。本書は、数千点におよぶ作品群から《プロムナード》《ムーランド・ド・ギャレットの舞踏会》《ピアノを弾く少女たち》など重要作77点を厳選収録。貧困や戦争、老いと病に苛まれた人生の後半まで、苦難を乗り越えながら、幸福を追求し続けた画家の生涯をたどります。

「ムーランド・ド・ギャレットには、私のモデルになってくれる女の子がたくさんいた。この絵の手の届く人々まで、うち一人は、金色の髪どしが付いた便箋に手紙を書いて私に送付付け、自分をモデルとして宛先送ってきた。もっとも、私は彼女がモンマルトルで牛乳を配達しているところは何度も出かけたのだが、ある日、ある男が彼女に小さなアパートを用意したことを知った。だが、彼女の母親が条件を出し、仕事を辞めてはならないと言ったそうだ。当初、私が心配したのは、ムーランド・ド・ギャレットでモデルにスカウトされた女の子たちのパロン連中が私のアトリエに「妻たち」をよこさないよう横柄を入れてくれないかというところだった。だが、彼らはまあまあ連中、中には自らモデルとなってポーズを取ってくれる者までいた。この手の女の子たちは誰にでも付いて行くのだろうか、など思ってはいけない。街に散らされた子どもたちの中にも、礼節をわきまされた者がいたのだ」  
——ピエール＝オーギュスト・ルノワール



ムーランド・ド・ギャレットの舞踏会  
1876年  
キャンバス・油彩  
131.5×176.5 cm  
パリ、オルセー美術館

34

35

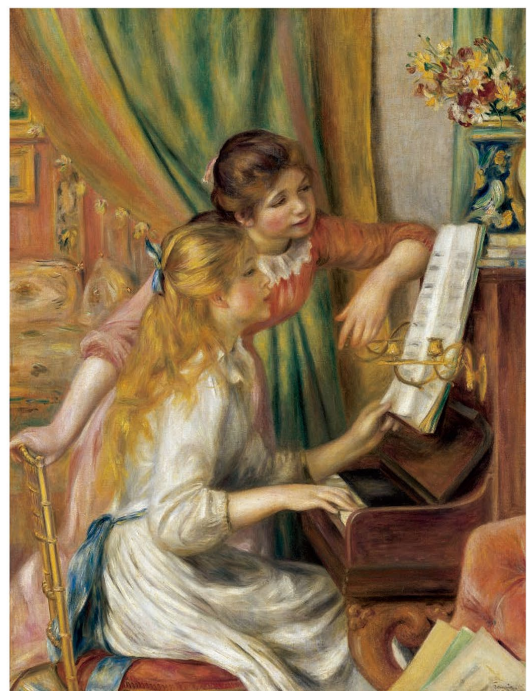


ピアノを弾くイヴランスとクリスティーヌ・ルロル  
1883年  
キャンバス・油彩  
73×92 cm  
パリ、オルセー美術館

「私たちが革新的だと思っているものは、自然においても芸術においても、実際には多かれ少なかれ古いものを作り変え、延命させたものにすぎない」  
——ピエール＝オーギュスト・ルノワール

ピアノを弾く少女たち  
1883年  
キャンバス・油彩  
116×90 cm  
パリ、オルセー美術館

82



木の下の草原に座って花輪を編んでいる少女たち(p.75)は、ロマン主義的汎神論の象徴だ。それは、激しい夜の中に流れ込み、苦もなく人間と自然を互いに融合させてしまう。少女たちはもはや、ある特定の時点で存在する実体を伴った人物ではない。明確な行動や感情を持って、太陽の下に、自然の中にいるわけではないのだ。もし、彼女たちが1870年代から80年代初期にルノワールが描いた場面の中の人物であれば、語は違っていたかもしれないが、ルノワールという画家の「庶民」との関係は、見せかけのものでないどころか、共感に満ちていた。それは、川辺で洗濯をする少女たちを描いた一連の作品(p.76)に見ることができ、ルノワールは彼女らの体つきや身のこなしの美しさに注目した。彼は、少女たちの重労働の深層には関心があった。その点で、その数十年前にドミニエが描いたものとは違っていた。

概して、彼の絵にはもはや人の心理を反映して構図を組み立てた形跡が見られず、人物間の位置関係は緊張感を欠いている。この理由は、色彩の律動的なパターンが対象物から切り離され、彼の想像力から湧き出した模様の形を取って作品の隅々にまで広がっていることにある。草や物体の上の光の斑点は、依然、現実の色彩を正確に観察した結果だが、もはや客観的な現実をできるだけ忠実に表

83

# ベーコン FRANCIS BACON

主に独学で美術を学んだフランシス・ベーコン(1909-1992)は第二次世界大戦後、悪評と共に頭角を現しました。描かれた不気味な形象は、グロテスクでありながらも、人間として生きることの試練とトラウマの反映であり、同時に人間の特性を深く掘り下げたもの、そして、美術史上初めて公然と「同性愛」というテーマを表現したものでもありました。本書では、《ペラスケスの教皇インノケンティウス10世の肖像に基づく習作》《トリプティック1974年3月》《横たわる女》など、名作・衝撃作78点を収録。現在日本語の画集が手に入らない、唯一無二の作家の作品世界に触れられる貴重な一冊です。



《トリプティック1944年》の第2バージョン  
1985年  
キャンバス・油彩、エアロノブ塗料  
三幅掛  
全寸幅198×147.5 cm  
ロンドン、ナート

くりと、苦しみが変化していく。この変化には恐怖と生命の両方が満ちており、力強く前進する歴史の中から現れたように見える。そのいくつかは、1920年代のピカソの沐浴者の絵を思い起こさせ、滑稽さと不安の間どこかに存在している。こうした形象は芸術の世界に由来すると同時に、人の心の奥底から湧き上がる観念のように感じられる。それは私たちに取りついてくるもののようにだ。ベーコンが最終的に描き出すイメージは、衝動的であり痛みを帯びている。強烈な感情から生まれる恐怖を表現している。この恐怖は作られたものではない。現実のものだ。生き生きと、まるで肉体的ように感じられる。あかかもベーコンが、彼自身の思考の過程でピカソの彫像と遭遇したかのようだ。そして、その道は彼自身のものとなった。後にベーコンは、まごころ言った。自分にとって過去の画家たちの業績は「造形のための道具」、すなわち、自分の考えを形にして表現するのを助けてくれる強靱な枠組みなのだ。

この絵の中には無数の手掛かりがあり、また、これを見る者の記憶の中にも無数の手掛かりがある。それらが示すのは、実は恐怖の感情が、深いところに内在するドラマに由来する、ということだ。それは、人間が自ら引き起こした災厄のドラマだ。この三連画が描かれた1944年は第二次世界大戦の最なかで、当時ヨーロッパは恐怖と動盪の中にあった。だが、この絵が本当に焦点を当てているのは、戦争そのものではない。戦争のような何らかの一事象を超えた、より一般



的で強烈な恐怖の感情が描かれているのだ。もし恐怖が特定の要因だけに由来するのであれば、人はそれを克服できるかもしれない。だがベーコンは、恐怖が人の生の基本的な一部分であることを示している。そして、人がそれを回避も解決もできない、ということを見せつけているのだ。そこには逃げ道も希望もない。ベーコンは絵画の力を駆使して、恐怖の最も深遠な経験を、それに見えぬ形状を与えようとして提示する。それはまるで、叫びを幽霊化するようなものだ。この絵の中の像は、何の明確な行為をも示していない。その存在の本質を理解する鍵は、作品の中に用いられている「習作」という表現にある。この言葉が示唆するのは現実の場面ではなく、画家たちが伝統的な方法論によって作品を制作するときの準備段階である。ベーコンは、この作品を「習作」と呼ぶことで、この絵自体が準備と変容の過程を主題としていることを伝えているのだ。この絵は現実の模倣ではない。この伝統的な習作という制作行為自体が、作品の主題となっているのだ。このアプローチを通じて、ベーコンは自分自身が生きてきた経験を純粋な感覚に交換し、それを全ての人が見識できるものとして提示する。このように絵画の創作自体が作品の主題に昇るという発想は、現代美術における最も先鋭的な野心の一つなのだ。

《風景の中の人物》(p.20) は、その翌年に制作された作品で、ここでは人物像が自然の風景の中に置かれている。ベーコンは、ある公衆の風景を遠近法的に描こうと考えた。それがきっかけで、彼はこの時期で最も力強い作品の一つを生み



的に付け加えられたものではなく、強い感情がどのように目に見えぬ形に移し替えられているか、ということと結び付いている。彼は、自分の作品の一つがどのように生まれたかを、次のように説明した。「突然、自分が描いた線から全く別のものを連想した。そして、その連想からこの絵が生まれたのだ」。これは、この絵の主題が、いかに描像の相互作用から生まれたかを伝えている。焦点は描像そのものにあり、それらが何を示すかではない。このように、作品名にある「絵画」は、美術における基本的な概念を指している。すなわち、絵の具を用いて描く行為自体のことだ。この作品名はまた、私たちが目の当たりにしているこの絵が単なる発想ではなく、ある現実の年に制作された現実の作品であることをも表している。こうした作品名が描かれた場面を説明することはない。だが今、目の前にあるもの、人間の行為を通じて作り出された絵画という現実を、間違いなく説明している。ベーコンにとって、絵画は現実の模倣を目的とするものではない。

代わりに、現実とは、いかに私たちの思考によって形作られているかを暴露するものなのだ。彼はこう考えた。絵画なら別の種類の現実を、人間の心の奥底にある現実を示せるのだと。それでもなほ、絵というものは、描き手の完全な自己。すなわちその人物の感情や思考、体の動きなどによって形成されるのだから、ベーコンは絵を、現実世界とは大きく異なるものと見なした。絵画は混沌とした複雑な過程を経て生まれる。そして、痛みや苦悶、不可思議な美の模倣が刻まれる。ゆえに、絵は現実の特殊な符号なのだ。人や絵画を、古典的な美術でたびたび試みられたような、常に現実世界の何かを模倣しただけのものだと思えないように、ベーコンは常に自分の絵の人間性を示すことに傾いた。彼の作品は努めて、明確な物語を伝えたり、人が日常的に目にしそうなものに類似したり、といったことがないように制作されている。

(6) 隣を伴う人物  
1954年  
キャンバス・油彩  
125.9×121.9 cm  
シゴ美術館  
Harriet A. Fox Fund

(6) チェンバジー  
1965年  
キャンバス・油彩  
152.5×117 cm  
シントラッパガム財団立美術館

(p.20) ペラスケスの教皇インノケンティウス10世の肖像に基づく習作  
1953年  
キャンバス・油彩  
153×116.1 cm  
アオウ、デモシアンアートセンター  
Nathan Emory Coffin collection, purchased with funds from the Coffin Fine Arts Trust